

## 第二章 南京の防衛態勢



歩哨にでも立っていたのであろうか、完全武装のまま疲れて眠る  
第十六師団の歩兵（常熟にて） 師団経理部・金丸吉生軍曹撮影

## 第一節 南京の兵要地誌

(要図1参照)

### 南京市の人口と重要施設

南京市の行政区域は南京城とその周辺近郊を含み、当時約百万と称された人口の大部分は城内と周囲の隣接街——即ち下関、漢西門外大街、水西門外大街、中華門外等の諸街に集中していた。

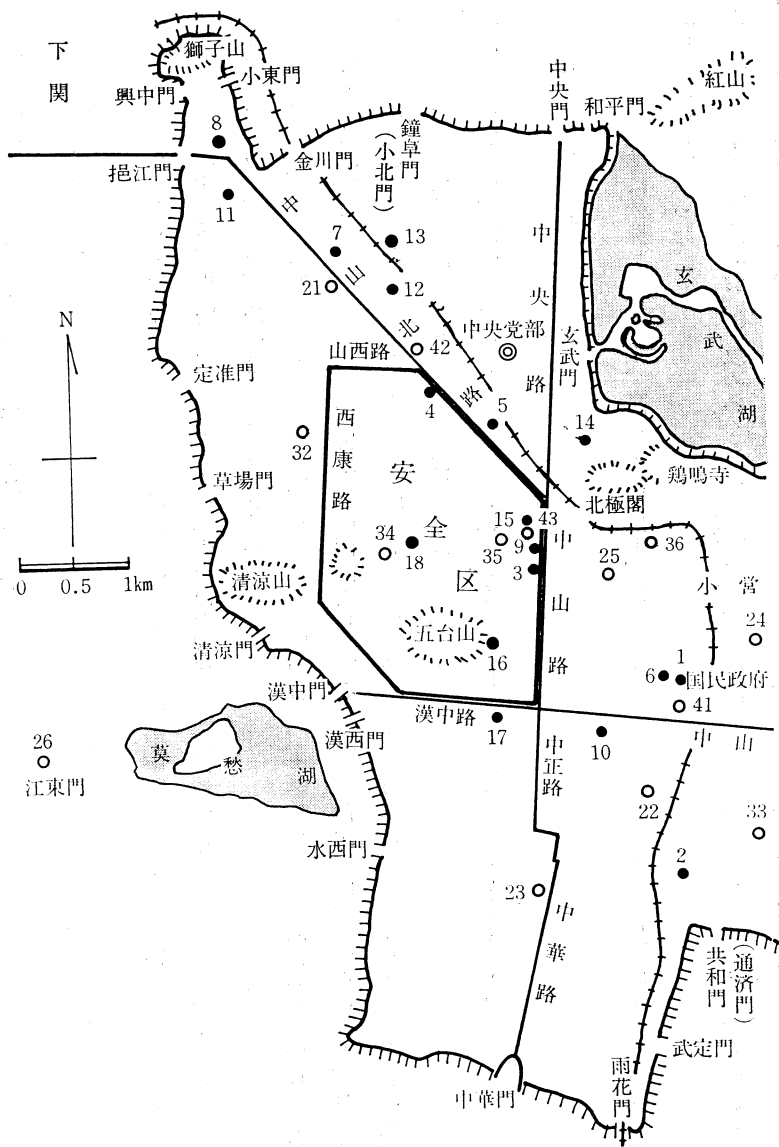
南京城内は東西約五・三<sup>ギ</sup>、南北約八<sup>ギ</sup>で総面積は約三十五平方<sup>ギ</sup>、その半分近い面積を占める北部と、約四分の一を占める南東部には、公共施設や空地が多く、民家はほとんど中山東路以南、鉄道線路以西の地域に密集していた。この城内の南西部の住民密集区は、東西約三<sup>ギ</sup>、南北約三・五<sup>ギ</sup>、面積およそ十平方<sup>ギ</sup>程度である。

また南京市の城内外には各種の重要施設、なかんずく軍事施設と諸外国公館が多数存在した。

国政の中心である国民政府や国民党中央本部のほか、軍事施設としては国防の中枢機関である參謀本部、軍政部、海軍部等があり、また城内の中山東路の南と城外の光華門の南には飛行場が設けられ、城東太平門の西、鷄鳴寺東側高地にはドイツ製最新式高射砲を据えた対空砲台が、また揚子江正面に対する防備として城内に獅子山、城北に幕府山砲台が構築せられ、城内には軍官学校、憲兵団のほか陸軍諸隊の兵營が、城外中山門東方には警衛師のほか湯水鎮に至る本道に沿う地区にはドイツ軍事顧問団の計画に基づき開校されたばかりの砲兵学校、歩兵学校、輜重兵学校、工兵学校等の実施学校が点在し、紫金山南側の平坦地はこれらの演習場となっていた。

また米・英・ソ・独・仏等の領事館、大・公使館が中山北路に沿う地区に集まり、城北地区と下関には英米系の商

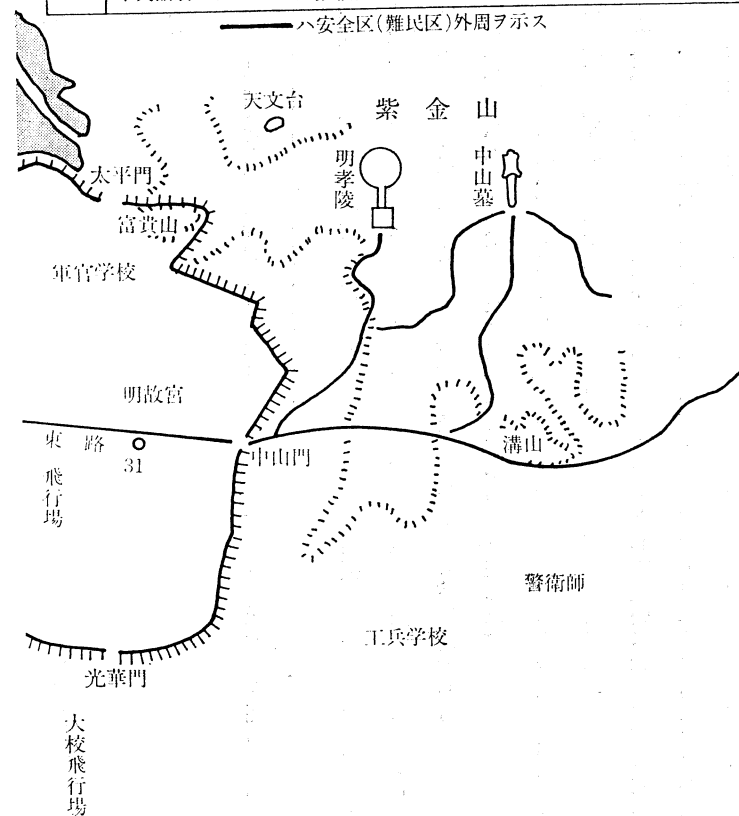
要图1 南京市



## 重要施設概況

|    |            |           |            |            |            |              |          |
|----|------------|-----------|------------|------------|------------|--------------|----------|
| 官學 | 1<br>國民政府  | 2<br>立法院  | 3<br>司法院   | 4<br>最高法院  | 5<br>外交部   | 6<br>參謀本部    | 7<br>軍政部 |
| 外公 | 8<br>海軍部   | 9<br>陸大   | 10<br>財政部  |            |            |              |          |
| 軍  | 11<br>英領   | 12<br>米領  | 13<br>仏領   | 14<br>ソ大   | 15<br>日領   | 16<br>独公     | 17<br>義大 |
| 田蹟 | 21<br>警衛師  | 22<br>憲兵団 | 23<br>憲兵訓  | 24<br>陸軍監獄 | 25<br>模範監獄 | 26<br>陸海空軍監獄 |          |
| 飯店 | 31<br>古物保存 | 32<br>吉林寺 | 33<br>第一公園 | 34<br>金陵女大 | 35<br>金陵大學 | 36<br>中央大學   |          |

——ハ安全区(難民区)外周ヲ示ス



社や倉庫が軒を並べていた。

また中山門の西には明故宮や古物保存所などの古蹟も存在した。

### 安全区（難民区）

（要図1参照、詳細は第五章第十二節）

安全区は城内中央ロータリーの西北に位置し、南は漢中路、東と東北は中山路および中山北路、北は山西路、西は西康路を境界とする南北三き、東西二き、面積三・八六平方<sup>キ</sup>の地域で城内面積の約八分の一を占めていた。この地域には、外国公館、教会、学校、病院などが多く点在する。

この安全区は、戦火が南京に迫った十二月はじめ、在南京の外国の紳商、大学教授、宣教師たちが、国民政府撤退後の難民の救済、秩序維持にあたるために「南京安全区国際委員会」を設立し、前記の区域を安全区とし、外交ルートを通じてその保証を求めてきた。現地軍当局は軍隊の立入禁止区域としてその趣旨を尊重はしたが、上海の安全区と異なり委員会の中立保持の能力を危ぶみ、公式にはこれを認めなかった。

安全区内の難民総数は、国際委員会の公文書によれば、日本軍の占領時約二十万人といわれている。

### 南 京 城

南京城は自然の地勢に依拠し、城壁は、高さ十二<sup>ス</sup>以上、厚さ六・六二ないし十二・一九<sup>ス</sup>、野山砲クラスの破壊射撃にはビクともしなかった。

一八六三年、太平天国の乱において攻めあぐんだ曾国荃<sup>そうこせん</sup>軍は、太平門付近に坑道を掘り、城壁を爆破している。

史書によると城の建造の折り、既に完成していた「裡城」のほかに、「外廓」を築き、この外廓は土壁のままで十

八の城門があったという。麒麟門とか高橋門とかがそれで、今も地名として残っているが、南京戦当時は土壁が残されていた。

その「裡城」——つまり内城が利用していた「自然の地勢」とは、北側は護城河、東側は北から玄武湖、護城河、南側は護城河と秦淮河、西側は三汊河や湖沼地帯というように、周辺に障害をめぐらし、一見「要害の地」とみえる。しかしながら、首都攻防の歴史をみると南京を守りおこせた戦例は皆無と言ってよく、まして近代戦では、城壁による抵抗などほとんど効果がなく、中国軍の「南京複廓陣地」も、紫金山や雨花台などに重点が置かれていた。

### 雨 花 台

（要図2、地図4参照）

南京城の南壁に沿って秦淮河が東から西に流れてそのまま城の外濠となり、外濠の南五百<sup>ス</sup>くらいの高台から丘陵が南に伸びている。丘陵は標高八十<sup>ス</sup>の高さで南北千<sup>ス</sup>、東西五百<sup>ス</sup>の縦長の高台となる、これが地図上の雨花台である。

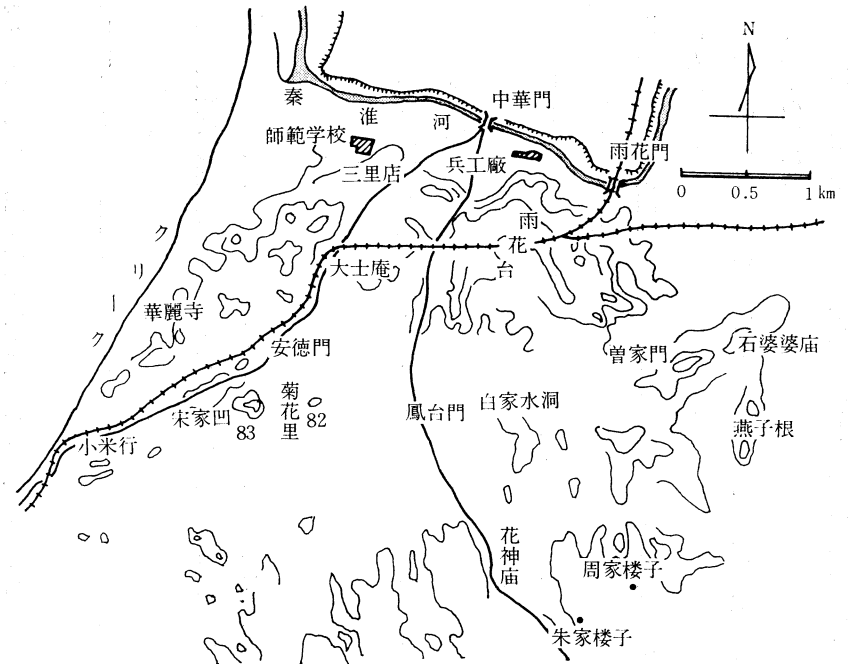
この高台を基点としてさらに台地は西南に長く伸び、等高線四十<sup>ス</sup>の丘陵地帯が二<sup>ス</sup>の幅で七<sup>ス</sup>ほど続き、台地の切れるところ本道上に西善橋がある。

この丘陵のほぼ中央部に安德門があり、この付近までの台地一帯を日本軍は広く雨花台と呼んだ。安德門の南には、南京戦の戦場となった菊花里と八十三高地がある。

この雨花台一帯の丘陵地帯は、南京城を防禦する南正面の重要地点であり、中国軍はトーチカを含む堅固な陣地を構築して頑強に戦ったのである。

丘陵の西には沼沢地帯が揚子江岸まで続き、湿地帯と丘陵の接線に沿うて京蕪鉄道とそれに平行して幹線道路が板

要図2 雨花台付近要図



- 注 1. 日本軍は華麗寺—菊花里—鳳台門—白家水洞—曾家門付近以北の高台を広く雨花台と呼んだ。  
地図上の雨花台は、雨花門南西に位置する東西500メートル、南北約1000メートルの台地をいう。
2. 雨花門は一般城門と異なり、列車を通す隧道式城門である。

橋鎮を通過して太平府—蕪湖に通じている。

東善橋—鉄心橋—安德門道はこの丘陵地帯を貫いて中華門に通じ、これと平行して麻田橋—花神廟—中華門道がその東二ギを走っている。

## 紫 金 山

(地図2参照)

紫金山は連峰で、その南西端は太平門から中山門を連ねる城壁に接しており、ここから東へ約七ギにわたって三つ、見方によっては五つか六つの峰が連なり、首峰四百八十八高地を「第一峰」と称する。その東南東三百八十二高地が「第二峰」、首峰の南西二百七十五高地が「第三峰」と呼ばれる。

この東西に長い連峰の南北両斜面は、麓から山頂に近づくにつれて急峻となり、とりわけ北斜面は、ここを攻め登った部隊の実感によると、「四十五度近い」といい、しかもほとんど裸の岩山であり、頂上には不規則に突き出した岩が重畳して、進むだけでも容易でなかったという。死角は利用できても、円匙などは受けつけないので、敵の既設陣地を奪うしかないことになる。

そのうえ、山腹には中山陵・明孝陵等の文化財が存在し、中国軍側の抵抗に利用されていたのかかわらず、これらに向けて射撃することは軍命令により固く禁じられていて、まことに攻めるに難い地域であった。

紫金山の南、雨花台の東は平坦地で中国軍の兵営、飛行場等が点在するが、防禦のための拠点に乏しく、戦術上、逆八陣地の凹角部分となり、北方の紫金山、南方の雨花台から砲火を集中されやすい地域である。

これに反し、紫金山の北から江岸沿いの幕府山連峰までの平地は、攻防ともに利用し得る拠点が多く、後に述べる十六師団の佐々木支隊と城内から脱出した中国軍との間で紛戦が展開されたのは、この平地である。



下関は、北部南京城の西、長江（揚子江）江岸に臨む地域をいう。京滬鉄道の停車場があり、対岸浦口に向かう渡船場や、中国海軍の碼頭があつて、江岸にはスタンダード石油、揚子江ホテルをはじめ米英系資本の貯木場、倉庫、石炭庫、大電力工場等が点在した。

この渡船場設備のうち特異なものとして、東洋一を誇る車輛航送設備があつた。この設備は、揚子江による鉄道輸送中断の隘路を解決するため、事変約一年半前に完成されたもので、下関、浦口側とも五十崙の桁四連で構成する電動可動浮棧橋によつて（季節によつて揚子江は水位の高低差が甚だしい）、機関車による車輛入換えを容易にした。また航送のための船舶は英国に発注新造したといわれる「長江号」で、甲板上に三車線を敷設し、船上に常に入換機関車を有し、三車線間はトラバーサー（遷車台、車輛をレールと一緒に横に移し、別の併行レールに乗せる装置）によつて移動できる構造となつていた。

この航送設備も敵敗退に当たつて破壊され、長江号は沈められたようである。

（関根保右衛門編著『華中鉄道沿革史』による）

## 南京城西側の湖沼地帯

南京城の西側、揚子江岸に至る地域は湖沼地帯で、漢西門・水西門門外には莫愁湖が水を湛え、その北には金沙場の大湿地が横たわり、また城壁に沿つて秦淮河、北に三汊河、中央部に北河が分流し、さらに揚子江支流の夾河が江岸と併流し、路外の行動は殆ど不可能に近い。秦淮河は水西門外船場など、広い所は河幅百崙もあり、帆船が揚子江

から通えるほどである。莫愁湖は渇水期の冬を迎えた南京戦當時は、西の部分約三分の一が干上がつていた。

## 南京 地理・気象諸元

（昭和六十三年理科年表による）

《位置》 北緯三二度・東經一一八度四八分

参考 宮崎 北緯三一・五五 東經一三二度二五分

高知 北緯三三・三三 東經一三三度二五分

《日出・日没》 十二月中旬には

日出・七時頃 日没・十七時頃

参考 十二月十六日の高知では

日出・七時七分 日没・十七時二分

《高度》 海拔一二m

《満月》 昭和十二年十二月十七日

《平均気温》 一月一・九度

参考 新潟二・〇度 東京四・七度

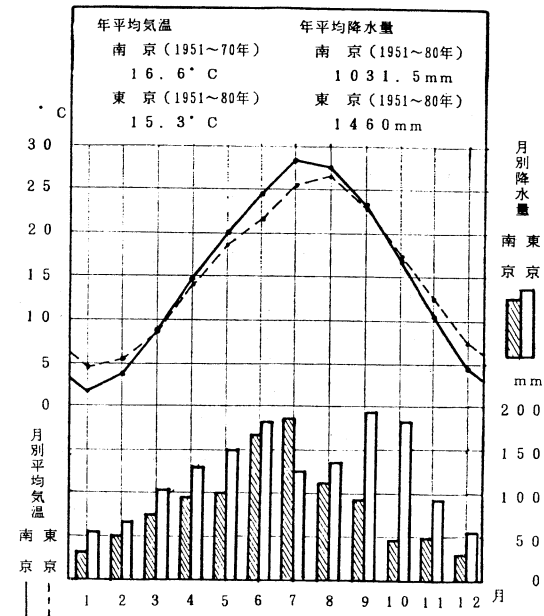
《一月平均湿度》 七三%

参考 東京 五三%

《一月降水量》 三〇・九mm

参考 東京五四mm

気温・降水量グラフ



## 第二節 南京防衛陣地と配備兵力

(要図3、4参照)

南京城は、第一節に述べたようにその北と西に長江を、東に紫金山、玄武湖、南に雨花台丘陵を控え、一見要害の地であるが、古来「断糧運、不戦而下金陵」すなわち、水陸から囲んで兵糧攻めにすれば、戦わずして金陵(南京)を降すことができるといわれ、戦術的には致命的な欠陥を持っていた。事実、六朝以来、多くの王朝の首都となったが、防衛に成功した戦例は皆無に近い。

にもかかわらず、蒋介石は昭和十二年十一月中旬(十六日から十七日)、南京固守の方針を定め、十五日重慶遷都を決定して二十日にはこれを宣言し、二十四日南京衛戍司令長官として唐生智を特任、二十五日南京衛戍軍の戦闘序列を示達した。

### 南京防衛の構想

(要図3参照)

国民党軍は昭和七年一月二十八日にはじまった第一次上海事変に敗れ、五月五日には「淞滬協定」(上海・呉淞地区の停戦協定)を結ぶという屈辱を味わった。『抗日戦争簡史』(以下『簡史』)によると、蒋介石は将来、上海が日本軍の華北侵略の支戦場になると判断し、密かに南京・上海地区の抗戦工事を準備した。

抗戦を二段構えとし、第一段階では上海の日本軍を一挙に殲滅し、増援部隊の上陸を不可能にする。そのため、竜華―大場の線に工事を施す。これがいわゆる淞滬線陣地帯である。



第二段階作戦は南京防衛戦であり『抗日戦争時期国民党正面戦場重要战役介绍』（以下『介绍』）によると、外衛線と内衛線の二線防禦とし、前者は呉福線と錫澄線、後者は城郊作戦と城内作戦にそれぞれ区分し、内衛線の工事は昭和九年から約二年半の間、四ヶ師の兵力を投じて行い、十一年秋には蔣介石が統裁する首都防衛演習まで行ったという。

第一段階作戦は攻勢、第二段階作戦は防勢という差異があり、南京防衛は首都を守るのが目的で、当時は重慶遷都を考えていなかったことがわかる。

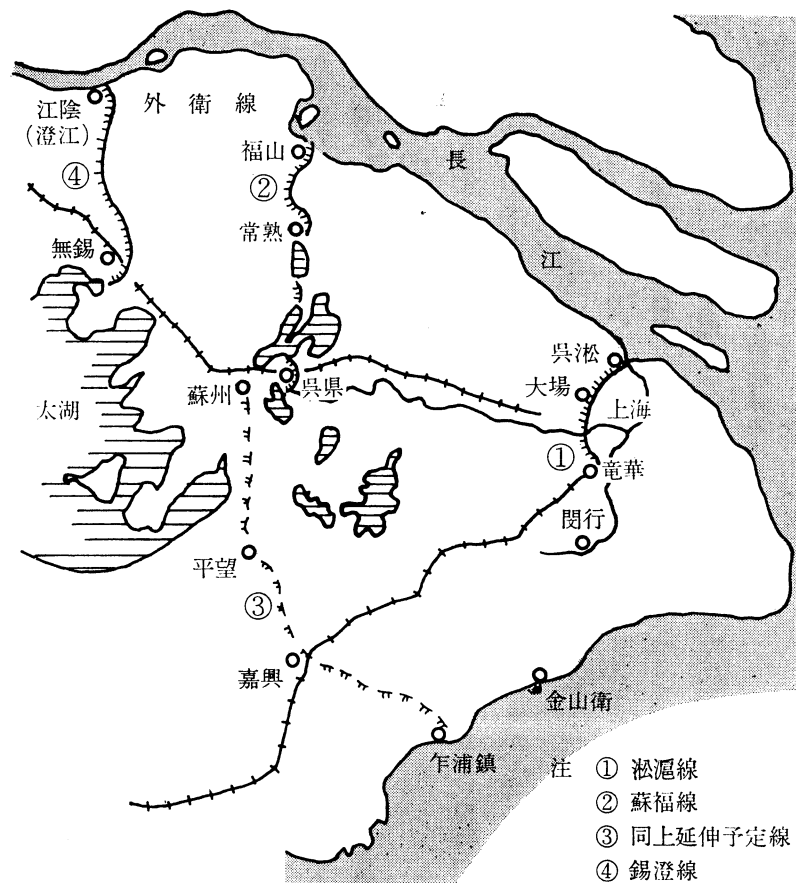
さて、呉福線とは呉県と福山を結ぶ陣地だが、これは杭州湾の乍浦鎮まで延伸中のところ、工事未完のまま我が第十軍の上陸を迎えたため、嘉興にはセメントが山積みそのまま残されていた。

次の錫澄線とは無錫と江陰（別名澄江）を結ぶ陣地である。

両線とも、線上の要地を拠点とし、両翼を長江と湖沼地帯に托していた。そのほか、『介绍』によると、外衛線と内衛線の中間にも、鎮江以南の線上（広徳まで）の要地に拠点陣地を設けていたという。

これら数線の陣地帯のうち、内衛線については後述することとし、そのほかの諸線は要図のとおりである。

要図3 淞滬線陣地と外衛線陣地



## 内衛線陣地の構成と強度

前述したとおり、内衛線も二段構えであった。

『簡史』によると、城郊作戦のための外周陣地（以下、「外周陣地」と略す）と、城内作戦のための複廓陣地がそれぞれである。

外周陣地は、烏竜山（既設の江防要塞を含む）、栖霞山、湯山、淳化鎮、牛首山という五つの戦術的要域をそれぞれ一拠点とする陣地構成であって、淞滬線陣地帯のように線状に結ぶものではない。

複廓陣地は、①挹江門、下関、獅子山（江防要塞）を含む拠点、②幕府山拠点と紅山拠点を両翼とする陣地、③紫金山と中山門を含む拠点（富貴山砲台も含まれる）、④紅毛山拠点、光華門、通済門を含む陣地、⑤雨花台と中華門を含む拠点、という五つの陣地から成る。

そのうち、③と⑤が兵家必争之地で主抵抗陣地とみられ、④紅毛山（中山門東方、標高四十余呎の小丘）拠点は薄弱で、逆八陣地の凹角部に当たり、戦闘にあたって大きな抵抗を見せなかったが、②の陣地は紫金山拠点を確保するかぎり、攻撃側が過失を犯したときには、攻勢転移の支<sup>し</sup>撐（注・足がかりの意・旧軍の戦術用語である）となる地形を抱え込んでいた。

さきに触れたように、内衛線の陣地構築には二年半の歳月をかけているが、陣地の強度は「マジノ線やジークフリート線に匹敵すると宣伝していたが、実際はトーチカがいくつかあるだけ」（ニューヨーク・タイムズ社ダーディン記者の観察）という、いわば比較的堅固な野戦陣地にとどまる。

## 戦闘序列

まず蒋介石が「南京衛戍軍」の戦闘序列を下達するに至った経緯を概観する。

十二年十一月五日、我が第十軍が杭州湾に上陸を開始し、その上陸成功が確認されると、中国軍は十一月九日、上海戦線からの総退却を開始した。その後、第一回（十一月十二日か十三日）、第二回（十四日か十五日）、第三回（十六日か十七日）の軍首脳会議が開催された。蒋介石が戦術的に不利な南京固守を決めたのは、南京が国父・孫文の墳墓の地であり、首都であるという面子と、また何らかの形で対日制裁を決議するものと期待していたブラッセル九カ国会議がみるべき進展なく、折りからドイツ大使トラウトマンから申し入れのあった和平交渉にも多かれ少なかれ関心を抱いていたからではなかろうか。

南京衛戍軍の戦闘序列発令日は、『抗日戦争正面戦場』に依れば、十一月二十五日、その戦闘序列が示され、以後逐次増加発令されたが最終の戦闘序列は次のとおりである。『正面戦場』四〇〇ページ）

なお、本項は主たる根拠を『抗日戦争正面戦場』によった。

南京衛戍軍司令長官・唐生智（二十四日特任）

副司令長官・羅卓英・劉興

第二軍団・軍団長・徐源泉

第四十一師・師長・丁治磐

第四十八師・師長・徐繼武

（注）後第十軍と改称された。

第六十六軍・軍長・葉肇

第五百五十九師・師長・譚邃

第六百六十師・葉肇（兼）

第七十一軍・軍長・王敬久

第八十七師・師長・沈堯藻

第七十二軍・軍長・孫元良

第八十八師・師長・孫元良（兼）

第七十四軍・軍長・俞濟時

第五十一師・師長・王耀武

第五十八師・師長・馮聖法

第七十八軍・軍長・宋希濂

第三十六師・師長・宋希濂（兼）

第八十三軍・軍長・鄧龍光

第五百五十四師・師長・巫劍雄

第五百五十六師・師長・李江

教導總隊・總隊長・桂永清

第三百三師・師長・何知重

第一百十二師・師長・霍守義

（注）

一、外周陣地配備予定

第二軍団（後第十軍）

第六十六軍

第七十四軍

第八十三軍

二、複廓陣地配備予定

第七十一軍

第七十二軍

第七十八軍

教導總隊

第三百三師

第一百十二師

江寧要塞部隊

憲兵部隊

軍直砲兵

憲兵部隊（約二団）・司令・肅山令

江寧要塞部隊・司令・邵百昌

砲兵第八団（一營）十五<sup>サ</sup>榴彈砲

砲兵第十団（一營）新十五<sup>サ</sup>榴彈砲

戰車防禦砲八門、輕戰車十輛

防空司令部所屬各高射砲隊（大小二十七門）

城防通信營

本部特務隊

ここで中国軍の編制について説明する。

もともと国民革命軍蔣介石直系の歩兵師は、創設の当初からソ連人の軍事顧問の助言により三単位制をとっていた。これに反し地方軍の歩兵師は日本軍の編制に準じて四単位制をとっていたのであるが、間もなく蔣直系師も四単位となった。

ただし、「教導總隊」は一九二四年、広州黄埔に陸軍軍官学校が創設され、同校軍教導団が設けられてからずっと三単位制をとってきた。

（注）一九三七年（民国二十六年）八月二十日における中国軍淞滬圍攻区（指揮官・張治中）の軍隊区分をみると、教導總隊の一部が参加したことになっており、また同年九月三日、何応欽軍政部部長（陸軍大臣相当官か）は、在南京の谷正倫防空司令・教導總隊桂總隊長に対し、教導總隊の派兵指導によって民夫を集めて南京付近の陣地

構築を指令していることから、教導総隊（三ヶ団）のうち、主力（二ヶ団）は桂総隊長の指揮のもと南京に駐屯し、上海戦線にはその一部（一ヶ団程度）が参加したものである。ただし、九月二十日から十一月三十日までのある時期、桂総隊長はその第二団を指揮し8GA長隸下で上海戦線にあった。（八一三淞滬抗戦要図より）

### 兵団の素質

当時の中国軍には、中央軍と地方軍があり、中央軍は直系軍と雑軍とに分けられていた。また雑軍は機に応じ逐次直系軍に組み替えられていった。

南京配備の中央軍直系兵団としては、教導総隊、第三十六師、第八十七師、第八十八師、第五十一師、第五十八師がある。

また中央軍雑軍として第六十六軍の第五百五十九師、第六十師（いずれも広東系）、第八十三軍の第五百五十四師、第五百五十六師および第三師、第十二師と第二軍団の第四十一師、第四十八師（第二軍団は北方系）がある。概して雑軍は直系軍に比べ編制、装備は劣っていた。

教導総隊は幹部の集団である最精鋭部隊で南京防衛の要、紫金山拠点を守備し、また第三十六師も唐司令長官の信頼が厚い優良兵団であった。また南京南正面の重要拠点雨花台を守備した第八十八師も我が第六師団将兵から賞賛されるほどの敢闘ぶりを示した。

このほか、志願兵の抗日義勇軍などもあるが、せいぜい後方支援に従う補助部隊程度であったと思われる。

### 配備計画等の変更

「南京衛戍軍戦闘詳報」によれば、予定配備の変更、配備開始の遅延、南京転進日時のおくれは次の通りであった。

一、第八十三軍は江陰方面から撤退し先ず丹陽―鎮江作戦を担当した

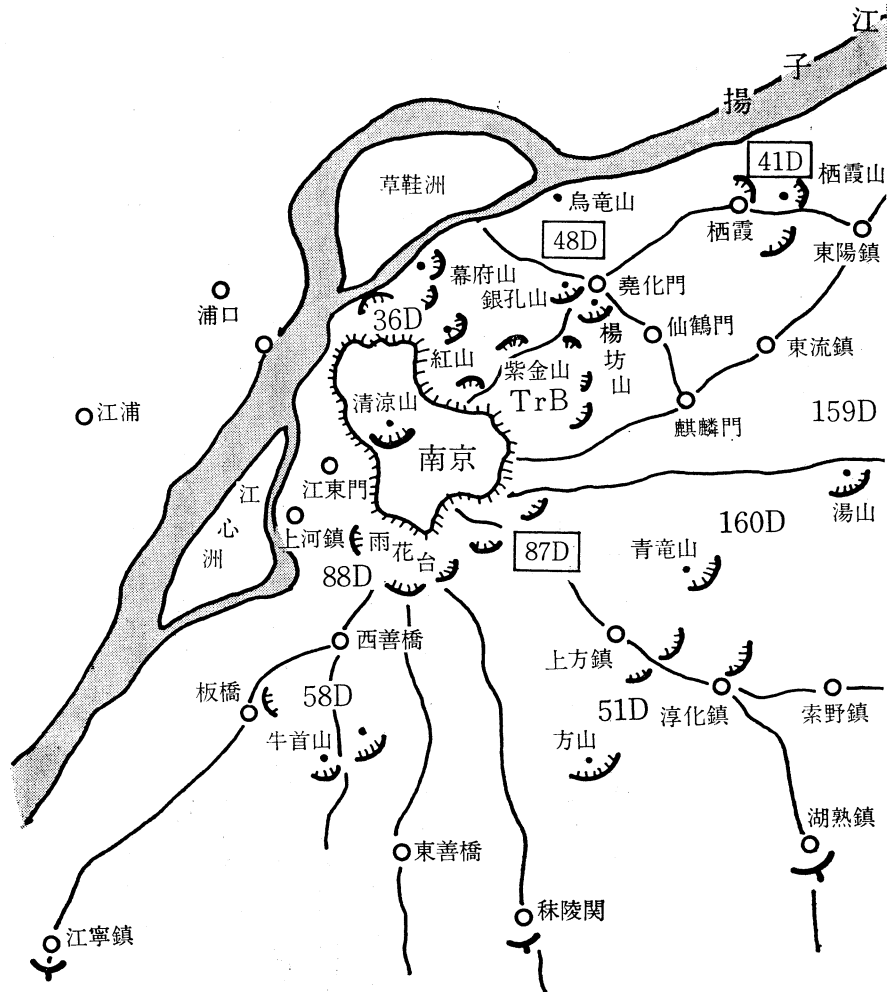
南京衛戍軍としては、当初、八十三軍に対し拝啓台から竜潭に至る鳳牛山付近の守備任務付与を計画していたが、同軍はこの陣地に就くことなく丹陽―鎮江方面の作戦にあたった。ために竜潭―孟塘の第一線陣地を第二軍団の第四十一師が、後続の第四十八師は烏竜山要塞部隊と連繫して楊坊山、烏竜山の守備に任ずることとなった。第二軍団の第四十一師の先頭は四日、下関につき直ちに竜潭に向かい急進した。

第八十三軍は鎮江付近作戦のため南京救援が遅れ、その第五百五十六師の二ヶ団が七日麒麟門に到着し第六十六軍長の指揮下に行動したほかは、第五百五十六師の残余の部隊は八日鎮江発、十日教導総隊の指揮下にあつて光華門、通済門の守備を担当、また第五百五十四師は八日夜句容付近発、十二日教導総隊長指揮下にあつて中華門守備を増援した。

二、第七十一軍の陣地占領は十二月七日以降となった

第七十一軍（第八十七師）は鎮江作戦のため南京到着がおくれ、その一ヶ団は七日、乗車して高橋門につき、第五十一師の第二線陣地をひきついで河定橋、上坊門、高橋門の陣地占領を準備し、八日夜、第八十七師の主力は指定地点に到着したが九日、河定橋、孫子里の陣地については僅か二ヶ団であった。（注・我が第九師団の歩三六は配備未完に乗じて、九日払暁までに光華門前に殺到した）

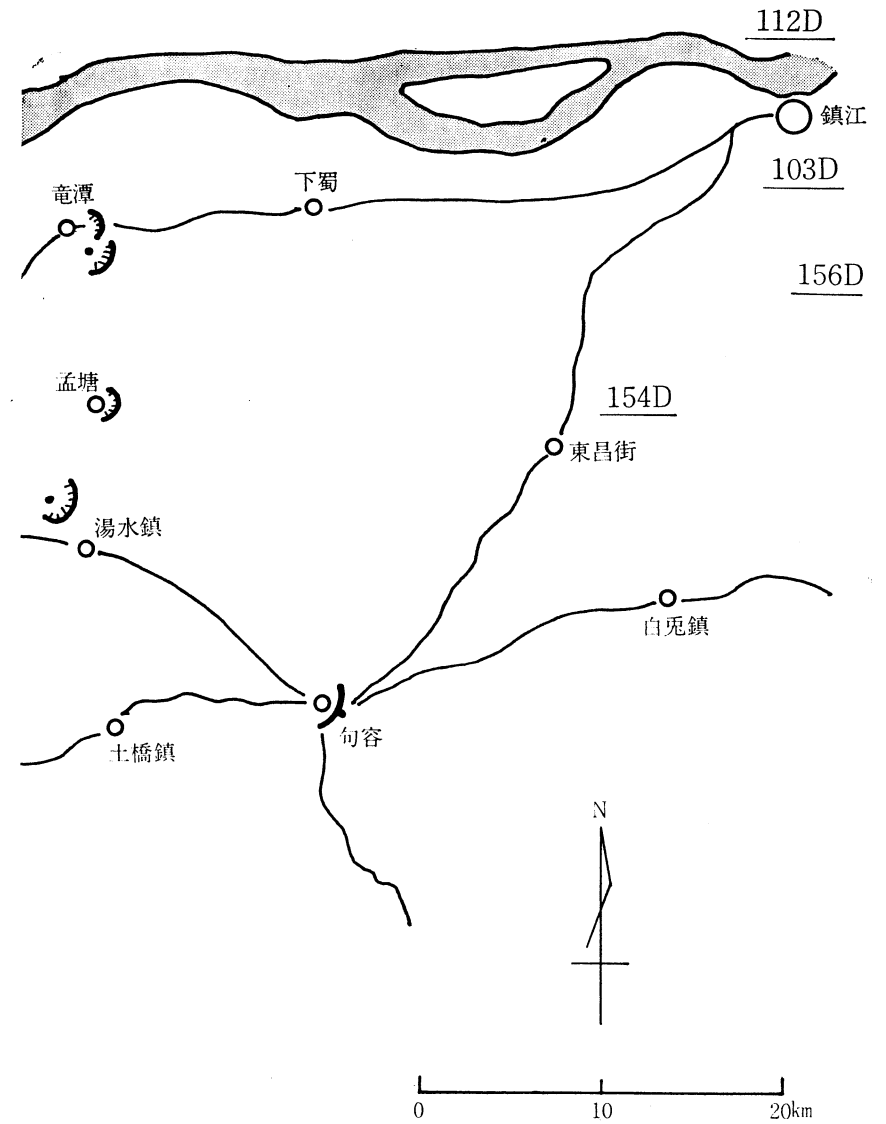
要図4 南京衛戍軍



注    12月4日以降配備の兵団

—— 鎮江方面作戰の兵団（南京増援兵団）

陣地配備要図



三、第三百師、第百十二師の南京方面救援は遅きに失した

八月十三日から十一月八日に至る間の中国側配備要図によれば、江陰兵团たる第三百師は江陰に、第百十二師は江陰北岸の靖江に配備されていたが、次いで鎮江作戰のため同地区に転進、両師ともに鎮江固守の任務についた。次いで両師とも命により八日鎮江発、南京方面に向け急進し、第三百師は九日夜城内につき、教導総隊長指揮下にあつて中山門の守備についたが疲労甚大、さしたる戦力とはなり得なかった。第百十二師主力は浦口方面に急進した。

なお上海から撤退して南京の防衛陣地についた各師の状況について『介紹』（三十八ページ）には次のように述べられている。「されど、わが部隊の大半は、淞滬より撤退せし疲憊の師、いまだ休まず整わず、補充すらなく戦力薄弱、あるいは到らず、あるいは混乱のなかに投じ、防禦せんにも組織せんにも違なし。」

### 兵力配備

「南京衛戍軍戦闘詳報」に基づく中国軍の兵力配備は、「要図4」に示すとおりである。  
以下、十二月三日までの作戦前と四日以降の配備経過の概要について説明を補足する。

一、十二月三日までの状況

### 複廓陣地

88師—右地区隊—雨花台および城南の守備

教導総隊—中央地区隊—紫金山および城壁東部の守備

36師—左地区隊—紅山、幕府山および城北の守備

憲兵部隊—城内清涼山付近の守備

旅長指揮の教導総隊の一団および烏竜山要塞部隊を以て長江封鎖線を警戒

### 外周陣地

72軍（88師）—右側支隊を江寧鎮に派遣して右翼掩護

74軍（51、58師）—牛首山、淳化鎮付近の守備、併せて秣陵関、湖熟鎮に前進部隊派遣

66軍（159、160師）—淳化鎮から鳳牛山に至る守備、併せて句容付近に有力な前進部隊を派遣

83軍（154、156師）—計画としては拝啓台より竜潭に至る鳳牛山付近の守備、なお下蜀に前進部隊を派遣Ⅱという任務を与える予定であったが、第八十三軍は、丹陽—鎮江方面作戰のため同方面に残った

二、十二月四日以降配備各師の行動の概況

### 第二軍団（第十軍）

41師—十二月四日先頭の一団が下関着、逐次到達する部隊を第八十三軍配備予定を引き継いで一部竜潭、主力栖霞山に配備

48師—十二月八日、南京に到着、烏竜山、楊坊山の線に配備

### 第七十二軍（第八十七師）

87師—鎮江作戰兵团であったが、十二月六日鎮江発、その二ヶ団は七日から八日にかけて高橋門に集結、河定橋—孫子里付近の陣地につく、主力も八日夜現地に到着する

第八十三軍

156師—鎮江作戰中のところ、六日主力を以て南京転進の命をうけ、その二ヶ団は七日夜麒麟門に到着、66軍長の指揮下に入る

154師—東昌街、白兔鎮方面で作戰中のところ、八日南京転進を命ぜられ、九日夜城内に入る  
その他の師団

103・112師とも鎮江固守の命をうけ作戰中のところ八日、南京急進を命ぜられ九日夜、103師は城内に、112師主力は南京対岸の浦口に到達した

各兵团が、南京衛戍軍の戦闘序列に入るまでの戦闘序列の移りかわりは次の表のとおりである。

戦闘序列の推移

| 上海戦末期 (10月初)                                                                                                                               |                                    | 南京戦直前                                 |
|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------|---------------------------------------|
| 右翼兵团                                                                                                                                       |                                    |                                       |
| 8GA                                                                                                                                        |                                    | 安徽省へ転進                                |
| 10GA                                                                                                                                       |                                    | 浙江省へ転進                                |
| 中央兵团                                                                                                                                       |                                    |                                       |
| 17GA                                                                                                                                       |                                    | 安徽省へ転進                                |
| 21GA                                                                                                                                       |                                    | 同上                                    |
|                                                                                                                                            | 8A, 3D, 61D                        | 同上                                    |
| 9GA                                                                                                                                        | 71A(87D), 72A(88D), 78A(36D), 教導総隊 | 南京へ3ヶ師半、但し71Aは当初鎮江作戰に参加               |
|                                                                                                                                            | 江陰兵团: 103D, 112D                   | 鎮江、次いで南京へ2ヶ師、但し112Dは浦口へ               |
| 左翼兵团                                                                                                                                       |                                    |                                       |
| 15GA                                                                                                                                       | 74A(51D, 58D)                      | 南京へ2ヶ師                                |
|                                                                                                                                            | その他                                | 安徽省へ転進                                |
| 19GA                                                                                                                                       | 66A(159D, 160D)                    | 南京へ2ヶ師                                |
|                                                                                                                                            | 83A(154D, 156D)                    | 鎮江—丹陽方面作戰後南京へ2ヶ師                      |
|                                                                                                                                            | その他                                | 江蘇省へ転進                                |
| 11AG                                                                                                                                       |                                    | 安徽省へ転進                                |
|                                                                                                                                            |                                    | 2AG(後10Aと改称)の41D, 48Dは武漢地区より南京に到る、2ヶ師 |
| <p>注 1. GAは集団軍, AGは軍団, Aは軍, Dは師を示す</p> <p>2. 南京衛戍軍の兵团は計13ヶ師半である。ただし、鎮江作戰に参加した5ヶ師と、12月4日～8日にかけて南京についた2AGの2ヶ師を除くと、終始南京戦場にあった兵团は6ヶ師半にすぎない</p> |                                    |                                       |

兵力判断

南京衛戍軍および参加各軍・各師の戦闘詳報を基とし、併せて第七十八軍長・宋希濂ほか参戦者の手記(『南京保衛戦』)ならびに当時在南京の第三国公式資料、第三国記者情報等を総括整理した南京衛戍軍の総兵力は次の表のように

南京衛戍軍總兵力判断

| 複 廓 陣 地   |             | 外 周 陣 地                                                                                                                                                                                                                                                                                                   |                  | 増 援 兵 団       |             |
|-----------|-------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------|---------------|-------------|
| 部 隊       | 兵 力         | 部 隊                                                                                                                                                                                                                                                                                                       | 兵 力              | 部 隊           | 兵 力         |
| 唐衛戍軍司令部   | 約 500       | 74A—                                                                                                                                                                                                                                                                                                      | 51D 7,000~7,500  | 83A—          | 154D 約1,500 |
| 78A (36D) | 約 7,000     |                                                                                                                                                                                                                                                                                                           | 58D 7,000~7,500  |               | 156D 約2,000 |
| 72A (88D) | 約 6,000     | 66A—                                                                                                                                                                                                                                                                                                      | 159D 2,500~3,000 | 103D          | 約1,000      |
| 教 導 総 隊   | 5,500~6,000 |                                                                                                                                                                                                                                                                                                           | 160D 2,500~3,000 | 112D          | 僅 少         |
| 71A (87D) | 3,000~3,500 | 2AG—<br>(10A)                                                                                                                                                                                                                                                                                             | 41D 6,500~7,000  |               |             |
| 憲 兵 部 隊   | 3,000~3,500 |                                                                                                                                                                                                                                                                                                           | 48D 6,500~7,000  |               |             |
| 軍 直 部 隊   | 3,000~3,500 |                                                                                                                                                                                                                                                                                                           |                  |               |             |
| 江寧要塞部隊    | 約 1,000     |                                                                                                                                                                                                                                                                                                           |                  |               |             |
| 計         | 小 計         | 29,000~31,000                                                                                                                                                                                                                                                                                             |                  | 32,000~35,000 | 約4,500      |
|           | 総 計         | 65,500~70,500人                                                                                                                                                                                                                                                                                            |                  |               |             |
| 備 考       |             | 1. 遊兵師と見られる兵团（日本軍情報では84D, 89D, 108D, さらに紹介では57Dなどがある）も合計1,000人以下と判断する。<br>2. 義勇兵, 民兵等の合計も1,000人以下と判断する。<br>3. 教導総隊については兵力判断の根拠となる資料に乏しいが, 3ヶ団編成, 上海戦には一部（1ヶ団程度）参加と判断した。<br>4. 71A (87D) の兵力については一部情報（『宋希濂手記』）では6~7千と書かれているがこれはとらない。<br>5. 当時現地にあって中国側情報を得易い立場にあった米側は約5万程度と判断している。<br>結論として総兵力6~7万程度と判断する。 |                  |               |             |

判断せられる。総兵力とは当時南京付近の戦場にあらわれたすべての中国軍の地上兵力で、鎮江—丹陽—東昌街付近のものは含まない。

南京衛戍軍の総兵力は六~七万程度と判断する。

個々の兵团の兵力判断の理由は次のとおりである。

唐衛戍軍司令部の五百人は、十二月十三日の錢大鈞に対する密電に記述されている。

78軍(36師)は、十一月二十二日南京につき、二ヶ団の補充をうけ兵力約七千となった。(『保衛戦』二三ページ)

72軍(88師)は、十一月二十五日より前に南京に到着して補充を受け、雨花台激戦後に拘らず、十二日師長の直接掌握約二千を有していた。『保衛戦』(一六五ページ)には兵力六千と記されている。

教導総隊は主力が南京に残り、上海戦参加部隊も補充を受けている。三ヶ団編制と判断した。

憲兵部隊は主力が南京に残り、編組は三ヶ団半、城内の清涼山、明故宮に陣地占領をしていることから、一ヶ団約千人と推定した。

軍直部隊は主力が南京に残り、兵力は野重二ヶ大隊、戦車防禦砲八門、軽戦車十輛、高射砲二十七門、通信大隊一、特務隊一等から少なくとも三千と判断した。

江寧要塞部隊は主力烏竜山、一部幕府山、獅子山等から類推し、約一千程度と推定した。

71軍(87師)は複廓陣地占領部隊ではあるが、骨幹以外の箇所であり、鎮江作戦から十二月七、八、九日にかけて転進しもちろん補充はうけていない。三千~三千五百程度と判断した。

74軍(51師、58師)のうち51師は、羅店鎮戦場(上海戦)で善戦二ヵ月、官兵の戦死過半となったが、南京戦まで



に数度の補充を受け、十二月三日から十二日夜までの南京戦場で戦死傷計五千七百有余があったにもかかわらず、十三日払暁江東門で反撃し、かつ十四日夜、江心洲（南京西方揚子江の中洲）で我が国崎支隊（歩四一の第七、第十二中隊）は51、58師の捕虜多数を釈放していることから判断し、少なくとも七千以上と推定した。

58師は外周陣地戦では51師の淳化鎮付近のような激戦はなかったが、しかし十三日黎明の新河鎮（南京西方揚子江江畔）における猛反撃は目を見張るものがあった。兵力は51師に準ずるものと推定した。

『保衛戦』（一四一ページ）には、七十四軍官兵一万七千とあるが、これはとらない。

66軍（159師、160師）のうち160師は、十一月十八日石塘鎮にあったが、当時の戦闘員は三千に足らずとあり、また十二月三日、青竜山陣地配備当時、その中核戦力であった956団の兵力が約一千ということから推定し、南京戦場に来た全師の兵力を二千五百から三千と判断した。

159師も概ね160師に準ずるものと推定した。

第二軍団（41師、48師）、41、48両師ともに上海戦場にいなかった無疵の兵团で武漢地区から舟便で下航し、四日以降逐次に栖霞山地区と烏竜山地区の陣地に配備され、主として我が軍の第十六師団の歩兵第九聯隊および右側支隊（佐々木支隊）と交戦した。しかし他の兵团と異なり背後の揚子江江岸に舟便を控置していたので容易に江北に渡江することができた。41師の戦闘詳報によれば南京到着以降十二月十七日までの戦死傷二、四〇一人（損失約三分の一）、江北において補充後六、二五〇人、同じく48師の戦闘詳報によれば、十七日までの戦死傷二、六一七人（損失約三分の一）、補充後五、四五三人とあることから推定し、当初の兵員を両師とも七千人程度と判断した。

83軍（156師、154師）、この軍は十二月初め鳳牛山陣地占領を命令されたが、江陰方面からの撤退後、まず鎮江、丹陽、東昌街方面の作戦にあたり、十二月七日以降、南京を救援したいわば南京増援部隊である。156師の二ヶ団だけは七

日、麒麟門につき66軍長の指揮下に入っているその兵力千〇千五百程度は推定し得るが、その他の部隊は八日鎮江発南京に向け急進しているので、南京城内に入り得たものはさしたる兵力ではなからう。

154師も八日夜句容付近発南京に急進、十三日、教導総隊長の指揮下にあつて中華門守備を増援しているが、南京城内に入り得たものは少数にすぎないと思われる。

156師、154師ともに江陰作戦でかなりの打撃をうけていたものと思われる。

鎮江守備軍（103師、112師）、両師とも江陰、次いで鎮江戦場でかなりの打撃を受け、しかも外周陣地戦闘酣の十二月八日、鎮江発南京にむけ急進した。十日、103師は教導総隊長の指揮下にあつて中山門付近の城壁守備に任じているが、総体的にみて、南京城内に入り得た兵力は僅少であらう。